



高齢者や障害者など「災害弱者」をどのように支援すればいいのか。三月十七日から宮城県内の避難所などで活動したNPO法人「ユースビジョン」(京都市)の赤沢清孝代表(三三)に聞いた。

(聞き手・林勝)

被災地でのような支援態勢を組んだか。

高齢者や障害者、子どもの教育などに取り組む各NPOが「被災者を取り組む各NPOが「被災者などをNPOとつないで支える合同プロジェクト」(つなプロ)を三月十四日に結成。私は事務局で情報収集や連絡役を務めた。一つは事務局で情

多様なNPOや公的機関と連携して、被災者の細かなニーズに対応した。多かったのが小麦や卵など

弁当や炊き出しが食べられないの(つなプロ)を二で、アレルギー対応食の手配をした。人工肛門を失った人のため、地元の高齢者支援団体に連絡を取って現物を用意。被災のショック

NPO法人ユースビジョン

## 赤沢清孝代表

### 避難所の支援——NPOに聞く

で手足をかむ自傷行為をする子ども。災害弱者も我慢して声に出さず、いざ行政に対応を求め、硬い面もある。NPOのスタッフはどうか。床の上で動けない高齢者には床ずれを防ぐマットを届けてもらってニーズを探し出したのか。避難所の運営者に「食欲のない

動けないお年寄りはいるか」「つえや車いすが必要な障害者はいるか」などを書いたチェックシートを基に状況を把握した。中部地方で震災があり、私たちが支援するところだ。

## 災害弱者のケアを

「そうした活動も本来は自治体職員がやるべきことでは。災害直後の職員は、多くの被災者に共通する支援を提供すること。スタッフがほか、大学生ボランティアが第一。細かな要望に手が回らない

子どもは「いませんか?」と尋ねたり、自分で避難所の状況を確認して質問を投げかける。そして自治体や専門団体との連絡役となり、具体的な支援につなげることが大切だ。

## もう、家はあきらめた

「家に入った途端、舞い上がってしまうよ」。一時帰宅をした知人にそう聞かされていた光一さんと幸さんは、自宅から荷物を持ち出す際の手順を何度も確認しあっていた。1日の一時帰宅。2人は打ち合わせ通り位牌のある1階の仏間に向かった。ところが、想定外の事態に見舞われる。位牌が、

地震で倒れたとみられる仏壇の下敷きになっていたのだ。仏壇を持ち上げ何とか回収したが、「思った以上に時間を食い、動転してしまった」。

梨奈さんと沙也加さんに託されたメモの品々を探そうと2階の子ども部屋に上がったが、思うように見つからない。アルバム、制服、教科書…。最後は手当たり次第にスーツケースに押し込んだ。

「結局、持ち帰れたのは位牌と子どもた

原発1号機からの避難  
いつの日か

—15—

ちの持ち物だけでした」。予定の2時間はあっという間に過ぎ、2人の累積の放射線量は50%を超えた。

一時帰宅者に乗せた帰りのバスは行きとは打ってかわり、沈黙に包まれた。食事を済ませるとようやく声が上がった。誰かが言った。「もう、家はあきらめた」。光一さんと幸さんもうなすいていた。

仮設住宅では、梨奈さんと沙也加さんが2人の帰りを待ちわびていた。思い出の品

々を再び手にすると、歓声を上げた。幸さんは涙が止まらなかった。「娘たちが喜んでくれたのが唯一の救いでした」。長い一日が終わろうとしていた。

**【はなわさん一家】** 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(43)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、会津若松市に移った。長女梨奈さん(18)は東京で大学生生活。